

オウム
対策住民
協議会
ニュース

烏山地域
オウム真理教対策
住民協議会

第36回 抗議デモ・学習会

5月12日(土)

- 抗議デモ 午後1:30集合 1:50出発 烏山区民センター前広場
- 学習会 午後2:30開会 烏山区民センターホール

講演 「2017年9月25日 東京地方裁判所判決と
今後の対オウム活動への影響と展望について」

2017年9月25日、東京地方裁判所は、「アレフとひかりの輪は一つの団体と認められない」として、ひかりの輪への団体規制法に基づく観察処分を取消しました。
この裁判において国の敗訴が確定すれば、本年1月22日の観察処分の更新も無効になります。本講演においては、東京地方裁判所の判決文を分析すると共に、今後の対オウム活動への影響と展望についてお話をさせていただきます。



講師：山口 貴士氏

山口 貴士氏の略歴

1976年生。2001年弁護士登録(東京弁護士会)。
2015年カリフォルニア州弁護士登録、リンク総合法律事務所勤務。
日本脱カルト協会理事兼事務局長、全国霊感商法対策弁護士連絡会、
カルト対策学校ネットワーク運営委員。

手話通訳があります

主催：烏山地域オウム真理教対策住民協議会

後援：世田谷区

第12回

リサイク ルバザー

4月14日(土) 午前10時 烏山区民センター前広場
(雨天の場合は3階会議室とセンター前広場テント内で行います)

募金へのご協力ありがとうございました。

- | | | | |
|---------------|-----------|--------------------|-----------|
| ●烏山区民センター文化祭 | 募金10,310円 | ●第30回中学生のつどい | 募金2,375円 |
| ●上北沢区民センター文化祭 | 募金7,370円 | ●第20回からすやま新年子どもまつり | 募金1,636円 |
| ●第35回抗議デモ・学習会 | 募金6,810円 | ●三世代地域交流もちつき大会 | 募金25,615円 |
| ●烏山・給田地区合同新年会 | 募金21,055円 | | |

オウム真理教事件死刑囚7人、東京拘置所から5カ所に移送

法務省は3月14日から、オウム真理教事件の死刑囚13人の内7名を、東京拘置所から5カ所に分散して移送を行った。移送されたのは、井上嘉浩(48歳)大阪、岡崎(宮前に改姓)一明(57歳)名古屋、中川智正(55歳)広島、新実智光(54歳)大阪、早川紀代秀(68歳)福岡、林(小池に改姓)泰男(60歳)仙台、横

山真人(54歳)名古屋となっている。全国の拘置所で現在死刑が執行出来るのは、大阪、札幌、仙台、東京、名古屋、広島、福岡の7箇所となっているので、死刑囚の刑が近づいているとの憶測があるが、そのことに関して法務省は、はっきりしたコメントはしていない。

地下鉄サリン事件から23年の集いに参加して 投稿

講演は高橋シズエさんの「心に残ったしわ」から始まった。事件当初、何をすべきか分からなかった時に、ある記者から裁判の傍聴を勧められた。それをキッカケに459回裁判を傍聴する。ご主人の突然の別れに泣くばかりだったが、サリン被害者の会の代表を引受け、被害者の苦しみを発信、被害者救済を国・自治体に訴え、国会には、被害者通知制度・刑事裁判の参加を訴えた。被害者・遺族・支援機構の弁護士・世話人の声が次第に重視され、2008年、被害者参加制度ができた。そのことで、被害者や遺族は、検察官の近くで審理を聞くことが出来、被告に直接質問することも可能になった。被害者救済法も成立し、国からの給付金も支払われるようになった。多くの方々の支えで、一步一步進めることができ

たが、一時は心的外傷後ストレス障害の症状も経験した。それを回復させたのは、米国で起こった9.11事件の被害者救済活動を行う遺族との交流などだった。

表題の「心に残ったしわ」は、何百何千万の細い細い心のしわが、23年の間に、何本かの太い縋になっているのではないかと思います。刑事裁判は被告が犯した罪に対しては刑罰を決める。その事実は確認できるが、被告の心の内面を知りたい。裁判は終了したが、地下鉄サリン事件を決して忘れてはいけない。これからも私たちは、解散・解体を追求し続けなければならないと心に誓った。

その後、元警視庁捜査第一課理事官、原雄一氏の「オウム真理教の捜査を振り返って」の講演に続き、参加者が各グループとなり、話し合いがされた。

上祐史浩は何を目指す？

寄稿

地下鉄サリン事件後、上祐史浩はオウム真理教の広報として弁明に追われ、連日テレビ画面を賑わしていた。「事件はオウム真理教とは関わりがない」と繰り返し、その言動から「ああ言えばジョウユウ」との新語まで生まれ、そのルックスと相まって上祐の追っかけも現れるという社会現象となった。当時上祐は、教団のNo2として麻原彰晃に重用される。そのことが関係しているかは計り知れないが、教団のなかでは直接殺人に手を染めていない幹部の一人であった。上祐は公文書偽造で3年間の拘留後、オウム真理教の後継団体アレフにためらいもなく復帰した。刑務所の3年間は、教団の活動や自己の行為への反省には興味を示さず、出所後の「たくらみ」を実現する構想を練っていたのだろう。アレフ復帰後は代表となり、元教祖麻原彰晃の影響を排除する方向へ舵取りをする。そのことが原因で幹部信者と対立が起き、代表を降りることになり2007年に脱会、ひかりの輪を結成する。以上が出所後の上祐の動きだが、私はその当時の上祐の思考や動きに、違和感がある。と言うのは、多くの幹部信者は麻原彰晃の説く「バジラヤーナの救済」（人は悪行を積むもので、ボア（殺人）して悪行を消滅させ、より高い世界に転生させる）を信じ、幾多の殺人を犯した。逮捕され、裁判で犯した罪におののき、公判で麻原彰晃の非人間性や奇行を目の当たりにし、マインドコントロールが解け、自らが犯した罪と向き合うようになった。一方の上

祐は、殺人行為に手を染めることなく、刑務所で自分の「宗教団体」を設立する夢ばかり見ていたのだろう。真実の反省をした人間と、反省が出来なかった人間の生き様は、その後の言動や思考内容を見れば歴然だ。ひかりの輪結成後上祐は、オウム真理教入信からの「反省と総括」をつらつらと述べている。本来であれば、反省とは出所後に発表するのが当然と考えるが、その当時は反省など眼中にはなかったようだ。時期を失した反省はやたら長文で、読み続けることさえ苦痛なのに、上祐の自慢話も満載とあっては、さすがに退屈になる。今となってみれば、その反省文も「脱麻原」を喧伝し、ひかりの輪の正当性を主張すると共に、自己陶酔が目的であったのだろう。さらに設立したひかりの輪の活動内容は、通販会社の宣伝を彷彿させ、アピール感満載だ。宗教団体でなく哲学サークル・「脱麻原」の耳馴染みの良いワード・アレフ信者の脱会を促す活動・聖地巡礼・ネット販売・外部監査委員会・内視と称し信者個人が肉親と話す・上祐が著名人と対話。よくもここまで策略を考えたものだ。だがそこから見えてくるのは、ひかりの輪という団体を、いかに社会に認めさせるかとの下心（観察処分逃れが最終目標）と、己の美化のみだ。もうそろそろ偏狭な虚栄心と自己満足を捨て、自然体の自分に立ち返ることを勧める。結果は以前とは違う自由な世界が見えてくるだろう。折角両親から授かった優秀な頭脳だ、それを多くの人が認める社会に還元することを望む。

住民協議会活動報告

3月17日（土） 「地下鉄サリン事件から23年のつどい」参加
3月20日（火） 実行委員会
3月24日（土） 足立区抗議デモ参加
3月26日（月） 編集会議 協議会ニュース174号初校
4月2日（月） 編集会議 協議会ニュース174号再校正

4月4日（水） リサイクルバザー物品受付
4月6日（金） リサイクルバザー物品受付
4月8日（日） リサイクルバザー物品受付
4月10日（火） リサイクルバザー物品受付
4月10日（火） 協議会ニュース174号発行

協議会ホームページアドレス <http://www.kyogikai.jp>

この協議会ニュースは、皆様の募金により発行されています。